

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：34309

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20H01354

研究課題名(和文) 日本古代土器の複眼的編年検証に基づく通時代的特質の解明

研究課題名(英文) Exploration of the diachronic nature of ancient pottery in Japan based on a multifaceted chronological analysis

研究代表者

中久保 辰夫 (NAKAKUBO, Tatsuo)

京都橘大学・文学部・准教授

研究者番号：30609483

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 11,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は次に述べる2つである。第一の成果は、国際的にも学際的にも通用する日本古代土器暦年代論の補強を行うことができた。特に編年研究上課題となっていた4世紀中葉から後葉、5世紀初頭から前葉、6世紀初頭から前葉、6世紀後葉、7世紀中葉の土器編年を複眼的な視点で点検できた。第二の成果は、日本古代の土器様式には同質性・紐帯確認を志向する饗宴戦略が色濃く反映していることが解明できてきた。そして、土師器に伝統/在来/ウチが、須恵器・施釉陶器に革新/外来/ソトが表象されており、この両面性が日本古代の特質であるという理解に至った。本研究成果は『日本古代の土器文化』として書籍化する予定である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

学術的意義は、a)古墳時代前期から平安時代までの土器編年と様式について通時代的かつ複眼的に研究した点、b)学際的に土器編年と暦年代論を補強した点、c)土師器と須恵器という器質を超えて様式的理解を深めた点、d)饗宴論を国際研究潮流を踏まえ、日本古代を事例に検討した点、e)土器調理痕跡に関する新規記録手法を開拓した点にある。

社会的意義は、市民講座、講演会などの求めに応じ、また研究成果を国内外に広く発信するために、日本語版(<https://haji-sue.jp/>)、英語版(<https://ancient-pottery.jp/>)のウェブサイト構築したことである。

研究成果の概要(英文)：The two results of this research are described below. First, we were able to strengthen the typochnology of ancient Japanese pottery, which can be used internationally and interdisciplinary. The pottery chronology of the mid to late 4th century, early 5th century, early 6th century, late 6th century, and mid 7th century, which had been an issue in chronological research, was inspected from a multifaceted viewpoint.

The second result is that we have been able to uncover that ancient Japanese pottery styles strongly reflect a feasting strategy oriented toward homogeneity/confirmation of ties. The Haji-earthenware represents the traditional/domestic/native, while the Sue ware and glazed ceramics represent the innovative/foreign/global. We have come to understand that this duality is a characteristic of the pottery style in the ancient Japan.

The results of this research will be published in a book entitled "Pottery Culture of the Ancient Japan."

研究分野：考古学

キーワード：日本古代 土器編年 土師器 須恵器 饗宴 今城塚古墳 布留遺跡 新堂遺跡

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

土器資料は出土量が多く、時期的・地域的な差異を明敏に示すため、年代の枠組み、地域性の解明など、世界各地における考古学研究の基礎資料となってきた。

土器の研究において様式とその変化の背景を追求する必要性を提起し、古墳時代から平安時代にいたる変遷をまとめた西弘海の「土器様式の成立とその背景」(『考古学論考』小林行雄博士古稀記念論文集刊行委員会、1982年)は代表的な論考である。20世紀後半、日本の土器研究は各時代、各時期、各地域、土師器や須恵器といった器質、甕や高杯といった器種単位に型式学的検討が大きく進んだ。そして、精緻な編年が確立するとともに地域性が克明になった。しかし、21世紀になっても通時代的な土器様式の比較、背景に関する考察は、西の提言とは裏腹にかえって低調なままである。資料数の増加と研究の精緻化によって、日本古代を見渡した土器論は、もはや研究者個人の限界を超えている。

一方、西の議論も a) 韓半島における資料増加と研究の進展により、東アジア各地との比較土器研究が進み、土師器と須恵器で構成される土器様式が日本列島独自のものとして評価可能になった点、b) 資料増加により編年の修正が必要となり、理化学的年代測定をふまえた暦年代観の提示が求められている点で課題を有している。

こうした研究現状の認識にたつて、研究開始当初に設定した学術的「問い」は、「土器様式にはいかなる時代性が反映しており、日本古代をつらぬく特質とはどういったものであるのか」、「日本古代の土器編年は理化学的にも検証され、客観的妥当性をもちうるのか」という2点である。これらの「問い」が解決できれば、日本古代土器固有の特質を把握することができると考えた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、a) 土器編年と暦年代に対して、複眼的視点によって国際的にも学際的にも通用する「補強」を行う(複眼的編年検証)、b) 補強された編年に基づき、土器様式の変遷とその背景について、「饗宴論」を導入して考察を深める(日本古代饗宴論)と設定をした。

複眼的編年検討は、端境期となる土器資料の型式学的検討を中心に、考古地磁気年代測定、光ルミネッセンス年代測定(以下、OSL法)、加速器質量分析法による炭素14年代測定(以下、AMS法)による成果をもとに点検することとした。こうした複数の年代測定を実施しなければならなかった理由は、考古地磁気年代測定およびOSL法は土器焼成時、AMS法はスヤコゲの付着する土器使用時、年輪年代法は木製品と土器の廃棄時期と、測定している時期が異なるためである。そして、年代測定結果に対し考古学的な再検証が十分になされていない事例もあり、課題となっていた。

日本古代饗宴論は、自身の仮説を検証することを目的とした。すなわち古墳時代では、東アジア情勢と連動した政治変動期に、新たに主導権を掌握した政治勢力が戦略的に歌舞飲酒を含む葬送儀礼や宮都での饗宴を刷新・共有したことが、土器様式の変化に反映する。そして、5世紀代に土師器を在来の伝統的供膳器として温存したことが、土師器と須恵器供膳具の互換性を特徴とする宮都的(律令的)土器様式の成立(7世紀)につながる。日本固有の古代土器様式は、革新/外来/ソトを表象した須恵器・施釉陶器、伝統/在来/ウチを象徴する土師器といった両面性が特質であり、これはこの時代に歴史的に形成された。

この議論においてカギを握るのは、土器を用いた儀礼の社会的、政治的意味を実証的かつ理論的に考察することであった。そこで国家形成期において正統性の承認や権力維持のために、エリート層が「饗宴」を戦略的に用いる世界各地の事例が収載された研究(Michael, D., Brian, H. (ed.) 2001. *Feasts: Archaeological and Ethnographic Perspectives On Food, Politics and Power* (Smithsonian Series in Archaeological Inquiry) – Smithsonian. など)を参照し、豊富な資料に基づく日本古代の各時代の事例を国際発信することも目的とした。

3. 研究の方法

本研究は、上述した目的に沿って、以下に述べる2つの研究の柱を相互に関連付けて遂行した。本研究方法の特徴の1つは、複眼的ワークショップ(以下、複眼的WS)として、30代~40代前半を中心とした研究分担者・協力者総勢19名によって、土器資料を手にとって観察しながら議論し、またオンライン会議を活用して論文輪読、研究発表を行ったことにある。

<複眼的編年検討> 複眼的WSで、編年基準資料を型式学的に検討し、理化学的年代測定がなされた資料あるいは共伴する土器の型式認定と出土状況を検証した。対象とする時期は、編年研究が不十分な時期である。具体的には布留2式~3式、TG232型式期~TK73型式期、MT15



陶器資料複眼的WS(2022年5月14日)

～10 型式期、TK43～209 期、飛鳥 ～ である。とりわけ型式認定、「焼成、保管、供給・流通、使用、廃棄」といった土器のライフサイクル、出土状況といった観点を複眼的に議論した。また理化学的年代測定は、AMS 法による年代測定を本研究で新規に分析した。

<日本古代饗宴論> 饗宴論の国際研究潮流と論点を把握し、饗宴に用いられた器の象徴性、場の変遷、饗宴に欠かせない酒の醸造について日本の考古資料より検討した。器の象徴性に関しては、土師器と須恵器の互換性について容量計測も含めて機能論的、組成論的に考察した。場の変遷に関しては古墳時代の古墳と飛鳥時代の宮都の空間構成を比較した。酒造に関しては、甕の容量変化を実証するとともに、5 世紀～9 世紀の蒸す調理を実験した。また米食に関しても実験と使用痕跡の観察を行った。

そして、日本古代の土師器が「刷新性」から「伝統性」へと移行していく過程を明らかにし、土師器供膳器を根強く使用し続ける饗宴の原型が日本古代に形作られていくという新理解が、複眼的 WS での議論を踏まえて得られた。

4. 研究成果

本研究課題採択から 2022 年度まで、COVID-19 の世界的な感染拡大の波があり、研究計画は部分的に変更せざるを得なかった。また、その余波が遠因となって国際共同研究として予定していた内容が期間内にはできなかつたところもある。しかし、ハイフレックス型会議の導入や土器調理痕跡記録手法の開拓によって研究は予想以上に進展した。

<複眼的編年検証> 布留 2 式～3 式、TG232 型式期～TK73 型式期、MT15～10 型式期、TK43～209 期、飛鳥 ～ の時期を中心に、理化学的年代測定法のデータを踏まえ、複眼的 WS で検証した。

布留 2 式～3 式については、布留遺跡（奈良県天理市）、新出資料である上牧遺跡（大阪府高槻市）、金生寺遺跡（京都府亀岡市）の出土土器を型式学的に検討した。金生寺遺跡に関しては AMS 炭素 14 年代測定を実施した。その結果、小型丸底土器の器形構成比と無稜高杯の杯部形状を基軸とする変遷が明瞭となった。布留 2 式は 4 世紀中葉、3 式は後葉という暦年代が妥当という結論となった。なお、有段高杯の出現を布留 3 式に認めるか、それとも TG232 期に出現するかといった点は課題として残った。

須恵器出現期（TG232 型式期～TK73 型式期）に関しては、布留遺跡趾之内（堂垣内）地区、岡本山 A3 号墳（大阪府高槻市）、クワンス塚古墳（兵庫県加西市）などの資料整理を実施し、発掘調査報告書に寄稿した。また、新堂遺跡（奈良県橿原市）河道出土土器を対象に、酸素同位体比年輪年代法と AMS 法の結果と土器のライフサイクルを検証した。そして、諸説林立していた初期須恵器年代について、TG232 型式期は 4 世紀末に遡上する蓋然性が高く、A.D. 410 年には TK73 型式期古段階が使用される状況であると推定することができた。

MT15～10 型式期については、未報告資料である今城塚古墳出土土器の資料調査が可能となり、MT10 型式期古段階に位置付けることができた。埼玉古墳群二子山古墳（埼玉県行田市）といった関東の事例も複眼的 WS によって検討し、須恵器の併行関係、土師器と須恵器の構成比を比較した。他に野々池 7 号墳（TK23・47 期～MT15 期、兵庫県三木市）、西乗鞍古墳（TK23・47 期～MT15 期、奈良県天理市）など、移行期の資料についても検討し、既往の年代観を確かめた。

TK43～209 期については、TK43 号窯（大阪府堺市）、土師の里遺跡（大阪府藤井寺市）、南畑古墳群（滋賀県高島市）、窟屋扇ノ坂古墳（三木市）を対象に検討した。型式学的検討が主となったが、TK43 型式期は陶邑窯跡群で実施された考古地磁気年代測定結果を再検討し、暦年代が 6 世紀第 3 四半期になることを確かめた。

飛鳥 ～ は、甘樫丘東麓遺跡、大官大寺下層、石神遺跡（奈良県明日香村）、日ノ岡堤谷窯（京都府京都市）、陶邑 TK217 号窯（大阪府堺市）、猿投岩崎 17 号窯（愛知県日進市）を検討対象とした。飛鳥 設定の重要性を確認したことに加え、TK43 型式併行期の土師器高杯の検討によって飛鳥様式出現の過程について見通しを得ることができた。なお、TK217 号窯、猿投岩崎 17 号窯ともに、型式的な幅が大きく、再検討の必要がある点も共有できた。

なお、8 世紀の土器編年様相として石上神宮所蔵須恵器大甕（8 世紀）、布留遺跡資料を、9 世紀の土器編年様相として平安京跡（京都市）、東播三木窯（三木市）などの編年的位置づけを行った。

以上の成果として、「日本古代の土器編年は理化学的にも検証され、客観的妥当性をもちうるのか」という問いに対し、「日本古代の土器編年は理化学的にも追認ができる蓋然性が高く、客観的妥当性がある」という理解に至った。ただし、古墳時代後半期における土師器の広域併行関係、東海と近畿の須恵器編年併行関係、平安時代須恵器の併行関係など、期間内に十分に追究できなかった点もある。

<日本古代饗宴論> 年 4～5 回実施した複眼的 WS とオンライン研究会によって、通時代的な見通しを持った饗宴論など、研究を深めることができた。以下に概要を記述する。

第一に土器様式の代表的論考、饗宴に関する英書の輪読会を実施し、課題を共有して議論を深めた。饗宴論の主眼は、饗宴主催者（首長・エリート層）の意図を読み取ることであり、それは饗宴の場（祭祀場や墳墓、饗応施設）饗宴に必須の酒類を醸造する貯蔵器、食事の調理道具、飲食を彩る供膳器からなる土器様式の分析によって可能となる点を確認した。そして、国家形成

期における饗宴論には「階層差を明示する片利共生的な饗宴戦略」を重視する立場 (Bray, T.L. (ed.) 2003. *The archaeology and politics of food and feasting in early states and empires*. Kluwer Academic/ Plenum Publishers.) と「同質性・平等性を強調する紐帯的饗宴戦略」に重きを置く立場 (Hayden, B. 2014. *The Power of Feasts: From prehistory to the present*. Cambridge University Press.) があり、ここが論点になっていると認識した。日本考古学の事例にも議論の適応を試み、律令期やその前史としての古墳・飛鳥時代には「紐帯的、地域統合のための饗宴戦略」が見いだせるのではないかという構想を得るに至った。

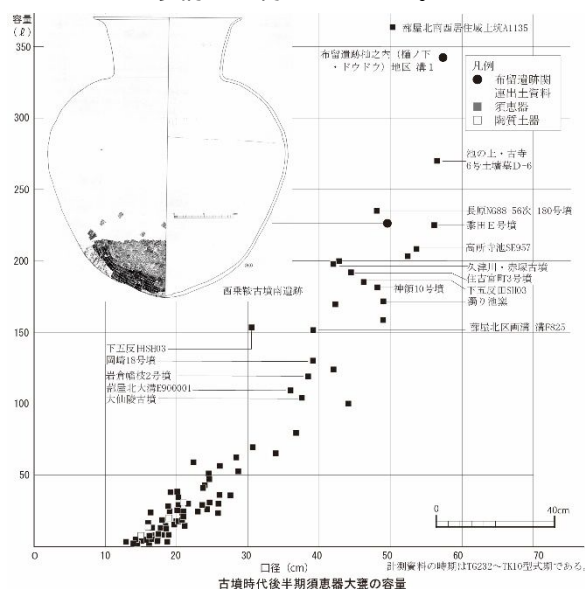
第二に COVID-19 の感染拡大によって資料調査ができなかった時期に、SfM/MVS 技術を用いた写真測量について勉強会をオンラインで開催し、時機を見計らって須恵器大甕 (南市東遺跡 (滋賀県高島市) など) などの計測を実施した。また、神領 10 号墳 (鹿児島県曾根郡) 西乗鞍古墳、黍田古墳群 (兵庫県たつの市) 今城塚古墳、石上神宮所蔵須恵器大甕 (奈良県天理市) など、甕容量の計測を実施した。その結果、須恵器大甕は 5 世紀: 300ℓ 代、6 ~ 8 世紀: 400ℓ 代、9 世紀: 500 ~ 600ℓ 代と内容容量が増大し、大型以上の甕は酒造・饗宴に関わることが解明できてきた。大規模饗宴の主催と酒造容器の技術統制が儀礼管理につながり、権力維持の一要因となったという研究展望がひらけた。

第三に不可視範囲も含めて同一物性を色分けできるハイパー・スペクトルカメラを導入し、客観的にススや被熱範囲の記録に成功した。また、赤外線カメラによって土器調理痕跡と製作技術痕跡が鮮明に撮影できるという技術も習得できた。この結果、饗宴論で欠かせない「なにをどのように調理したのか」といった議論に対し、実証的な議論ができる基礎を構築できた。そして、炊飯調理 (炊き干し法) が、「蒸す調理」に交替するとみられていた 5 世紀以降も継続している点を実物資料で確認できた。

第四に実験考古学的手法を用いた調理方法の復元を実施した。紀伊風土記の丘の復元竪穴住居において、復元長胴甕、甑、球胴甕 (鳴神遺跡群、森之宮遺跡をモデル) を用いた。蒸す調理を中心に、コメ品種や調理過程を試行錯誤し、蒸す調理は多量の酒造・醸造とかかわるのではないかという着想を得るに至った。また平安時代復元土器を用いた復元調理実験をもとに、調理痕跡の付着状況や調理内容の復元を検討した。スス付着範囲や被熱範囲等についても解析を進め、その成果をもとに弥生時代から平安時代に至る煮炊器変遷図を作成した。

第五に国際比較・発信については東アジア土器様式比較、饗宴関係遺跡を題材に研究論文執筆を進めるとともに、韓国での国際学術大会等で公表した。また、仏考古学者を招き、日仏古代考古学研究最前線ワークショップを開催した。そして、4 年間にわたる研究が熟してきたため、研究分担者および協力者より原稿を集め、『日本古代の土器文化』と題する書籍を刊行する準備を整えた。

以上の成果として、「土器様式にはいかなる時代性が反映しており、日本古代をつらぬく特質とはどういったものであるのか」という問いに対し、次の解を得ることができた。日本古代の土器様式には各時代の同質性・紐帯確認を志向する饗宴戦略が色濃く反映している。そして、日本古代における饗宴は、そこで用いられる土師器に伝統 / 在来 / ウチが、須恵器・施釉陶器に革新 / 外来 / ソトが表象されており、この両面性が特質であるという理解に至った。この成立時期は複眼的に補強した暦年代観でいえば、5 世紀初頭から前葉であり、さらに 7 世紀中葉に宮都的土器様式として発展する。この時期は、東アジア世界の影響を大きく受ける時期であるが、外的要因だけではなく、そこに日本列島独自の動きも認められることが判明した。



須恵器大甕の容量計測 (古墳時代後半期)



復元カマド・土器による調理復元

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計14件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 中久保辰夫	4. 巻 41
2. 論文標題 須恵器生産の展開	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 124-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中久保辰夫	4. 巻 31
2. 論文標題 古墳時代の家族・ジェンダー 近畿地域の事例を中心として	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 女性歴史文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 21 - 32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小田裕樹	4. 巻 なし
2. 論文標題 西大寺食堂院跡出土の甕	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 古代寺院の食を再現する	6. 最初と最後の頁 61-76
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小田裕樹	4. 巻 5
2. 論文標題 平城宮東院地区の遺構変遷に関する基礎的検討	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 文化財論叢	6. 最初と最後の頁 431-450
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小田裕樹	4. 巻 14
2. 論文標題 古代宮都・寺院と台所	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 家具道具室内史	6. 最初と最後の頁 34-54
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩越陽平 (米田敏幸・岩越陽平・木村結香・柳澤一宏・山下隆次)	4. 巻 26
2. 論文標題 吉野川流域古墳文化の研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 由良大和古代文化研究協会 研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中久保辰夫	4. 巻 74
2. 論文標題 近畿地域の古代百済系 (韓系) 移住民の研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 百済研究	6. 最初と最後の頁 81-135
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小田裕樹	4. 巻 -
2. 論文標題 群集墳の終焉について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 群集墳研究の新視角	6. 最初と最後の頁 165-194
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩越陽平	4. 巻 -
2. 論文標題 器種構成からみた群集墳の須恵器副葬について 大和・河内地域のいくつかの群集墳の事例から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 群集墳研究の新視角	6. 最初と最後の頁 165-194
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 池田保信, 石田大輔, 石田由紀子, 太田三喜, 岡田憲一, 木村理恵, 桑原久男, 小泉翔太, 中久保辰夫, 松本洋明, 溝口優樹, 三好裕太郎, 森暢郎, 山本亮	4. 巻 24
2. 論文標題 大和布留遺跡における歴史的景観の復元	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 研究紀要(公益財団法人由良大和古代文化研究協会)	6. 最初と最後の頁 1-152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中久保辰夫	4. 巻 342
2. 論文標題 考古学からみた播磨の渡来人と秦氏	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 歴史と神戸	6. 最初と最後の頁 14-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 NAKAKUBO, Tatsuo	4. 巻 8(1)
2. 論文標題 Interregional Interaction Strategies in the Early State Formation of Ancient Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Japanese Journal of Archaeology	6. 最初と最後の頁 79-124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中久保辰夫	4. 巻 227
2. 論文標題 須恵器生産と地域社会の展開	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 古代学研究	6. 最初と最後の頁 20-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小田裕樹	4. 巻 121(11)
2. 論文標題 飛鳥の土器と『日本書紀』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 國學院雑誌	6. 最初と最後の頁 332-361
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計21件（うち招待講演 18件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 中久保辰夫
2. 発表標題 播磨の渡来人ー古墳時代対外交流の諸相
3. 学会等名 特別展「須恵器伝来ー渡来人が伝えたやきものー」記念講演会（招待講演）
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 中久保辰夫
2. 発表標題 古代の食を復元する 食文化からみるSDGs
3. 学会等名 滋賀県文化財保護協会 文化財連続講座2023 日本史探求 近江1万年の物語（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中久保辰夫
2. 発表標題 日本出土の百濟様式の住居址とこれに伴う竈、竈の焚口枠、煙突の特徴
3. 学会等名 百濟研究所2023国際学術大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中久保辰夫
2. 発表標題 古墳時代のものづくりと古市古墳群造営勢力の戦略
3. 学会等名 令和5年度 世界遺産「百舌鳥・古市古墳群」の魅力を楽しむ市民講座（第1回）（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中久保辰夫
2. 発表標題 山科の遺跡と御廟野古墳
3. 学会等名 公益財団法人古代学協会2023年度第1回公開講演会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中久保辰夫
2. 発表標題 今城塚古墳から出土した土器とよみがえる大王の饗宴
3. 学会等名 今城塚古代歴史館八二ワの日記念講座（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中久保辰夫
2. 発表標題 海を渡って来た物と技術
3. 学会等名 兵庫県立考古博物館春季特別展「古墳時代の技術革新」講演会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 滋賀湖西北部における群集墳の形成過程
2. 発表標題 滋賀湖西北部における群集墳の形成過程
3. 学会等名 日本考古学協会第89回（2023年度）総会（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中久保辰夫
2. 発表標題 日本の食文化「おおむかし」と「いま」～考古学からみたSDGs～
3. 学会等名 令和4年度 あべの市民セミナー（招待講演）
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 中久保辰夫
2. 発表標題 初期須恵器の生産と韓半島から渡来した陶工たち
3. 学会等名 令和4年度春季特別陳列「茅渟縣陶邑と須恵器生産のはじまり 大庭寺遺跡出土品指定記念」講演会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中久保辰夫
2. 発表標題 物部氏の台頭と権力基盤としての布留遺跡
3. 学会等名 令和4年度 山の辺文化会議総会 記念講演（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中久保辰夫
2. 発表標題 古墳時代の家族・ジェンダー 近畿地域の事例を中心として
3. 学会等名 女性歴史文化研究所シンポジウム「考古遺物からみる先史の女性・子ども・家族」（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中久保辰夫
2. 発表標題 東播磨地域の中期古墳と出土品の再整理報告
3. 学会等名 第22回播磨考古学研究集会 「播磨の中期古墳」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中久保辰夫
2. 発表標題 布留遺跡出土の須恵器について
3. 学会等名 天理市観光協会設立65周年記念講演会 「ここまで判った布留遺跡 - 物部氏以前とその後 - 」
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中久保辰夫
2. 発表標題 考古学からみた河内と大和の物部氏
3. 学会等名 「考古資料からみた 八尾の古代氏族 - 物部氏 - 」特別展記念講演会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩越陽平
2. 発表標題 奈良県五條市の事例にみる須恵器生産地と周辺古墳の関係
3. 学会等名 考古学研究会関西例会第233回研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 中久保辰夫
2. 発表標題 杣之内古墳群と布留遺跡からみた物部氏
3. 学会等名 第87回企画展「物部氏の古墳 杣之内古墳群」記念講演会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中久保辰夫
2. 発表標題 日本最古の窯業と百舌鳥・古市古墳群
3. 学会等名 羽曳野市民大学 世界遺産「百舌鳥・古市古墳群」を深く知るための世界遺産講座（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金澤雄太・原田昌浩・花熊祐基・中久保辰夫・早野浩二・溝口優樹
2. 発表標題 ミニシンポジウム 地域社会の展開と手工業生産 埴輪生産遺跡と集落・古墳の対比から
3. 学会等名 古代学研究会例会・ミニシンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 中久保辰夫
2. 発表標題 近江湖西北部における韓半島系土器と渡来人
3. 学会等名 朝鮮古代学研究会例会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 中久保辰夫
2. 発表標題 古代百済系（韓系）移住民の研究 国家、地域間の交流
3. 学会等名 2020忠南大学校百済研究所国際学術大会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計5件

1. 著者名 古代学研究会、東影 悠、金澤雄太、原田昌浩、花熊祐基、中久保辰夫、早野浩二、溝口優樹、山口等悟、森岡秀人、坂 靖、高橋克壽、廣瀬 寛、和田一之輔、小嶋 篤、三好 玄(担当:分担執筆, 範囲:古墳時代須恵器生産に関する研究の現状と課題、須恵器生産と地域社会の展開)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 六一書房	5. 総ページ数 385
3. 書名 埴輪生産からみた地域社会の展開	

1. 著者名 第22回播磨考古学研究集会実行委員会	4. 発行年 2022年
2. 出版社 柳生印刷所	5. 総ページ数 344
3. 書名 第22回播磨考古学研究集会 「播磨の中期古墳」資料集	

1. 著者名 中久保辰夫 (担当:分担執筆, 範囲:2 王権と手工業生産)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 K A D O K A W A	5. 総ページ数 272
3. 書名 シリーズ地域の古代日本6 畿内と近国	

1. 著者名 三好裕太郎、桐井理揮、中久保辰夫、内田真雄	4. 発行年 2023年
2. 出版社 高槻市	5. 総ページ数 40
3. 書名 岡本山A3号墳発掘調査報告書	

1. 著者名 植田恵美子, 小川真理子, 立花聡(故), 中久保辰夫, 宮原文隆, 森幸三, 吉永健人 (担当:分担執筆, 範囲: 第6章 クワンス塚古墳の築造背景と歴史的意義 2. クワンス塚古墳出土品からみた玉丘古墳群の被葬者 像)	4. 発行年 2023年
2. 出版社 加西市教育委員会	5. 総ページ数 246
3. 書名 クワンス塚古墳 附章1 壇塔山古墳・芳ヶ端下古墳、附章2 ジヤマ古墳、附章3 東長本2・3号墳	

〔産業財産権〕

〔その他〕

日本古代土器の基礎知識
<https://haji-sue.jp/>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	小田 裕樹 (ODA Yuki) (70416410)	独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・主任研究員 (84604)	
研究分担者	岩越 陽平 (IWAKOSHI Yohei) (60815067)	奈良県立橿原考古学研究所・調査部調査課・主任技師 (84602)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	藤野 一之 (FUJINO Kazuyuki) (20879184)	駒澤大学・文学部 (32617)	
研究協力者	横田 真吾 (YOKOTA Shingo)		
研究協力者	酒井 将史 (SAKAI Masashi)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	笹栗 拓 (SASAGURI Taku)		
研究協力者	石坂 泰士 (ISHIZAKA Taishi)		
研究協力者	中里 信之 (NAKASATO Nobuyuki)		
研究協力者	大西 遼 (OONISHI Ryo)		
研究協力者	桐井 理揮 (KIRII Riki)		
研究協力者	山中 良平 (YAMANAKA Ryohei)		
研究協力者	仲辻 慧大 (NAKATSUJI Keita)		
研究協力者	竹内 裕貴 (TAKEUCHI Yuuki)		

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	三好 裕太郎 (MIYOSHI Yutaro)		
研究協力者	飯塚 信之 (IIZUKA Nobiyuki)		
研究協力者	名村 威彦 (NAMURA Takehiko)		
研究協力者	三原 翔吾 (MIHARA Shogo)		
研究協力者	趙 晟元 (CHO Seong Won)		
研究協力者	酒井 祥子 (SAKAI Sachiiko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 日仏古代考古学研究最前線ワークショップ	開催年 2024年～2024年
-------------------------------	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------

米国	IIRMS			
----	-------	--	--	--